

保育を裏付けるものを考える(2)

—— 米国の実践例から学ぶこと ——

森 眞理

米国では一九六〇年代の公民権運動を出発点として、

一九九〇年代には、人種・差別に伴う行動様式や社会階級に対する偏見・差別是正、民族・言語・宗教等文化の多様性に目を向け、違いを知り受け入れ合うことがさかんに叫ばれている。多くの幼児教育者も一人一人の子どもの背景に目を向け尊重しようと声を上げている。

現実の保育の場でどのようにこれらが反映されているのであろうか。米国の幼児教育者は、どのような裏付けに基づいて保育を展開しているのであろうか。筆者は大

学院の幼児教育学科専攻学生としてある幼稚園にて一学期間（一九九三年二月―五月）参加実習した。そこでの子どもたちと教師の取り組みを見ながら保育の裏付けについて、更に米国の実践から日本の保育者への課題についても考えてみたい。

尚、本稿の幼稚園実践例はほんの一例にすぎず、米国全ての幼児教育を語っているものではないことをあらかじめ断っておく。

◆米国ニューヨークのキンダーガーデン^{注①}(幼稚園)における主題『城』を中心とした展開

筆者が参加実習したキンダーガーデンは、私立で大都市中心部にある。実習したクラスは、全員男児、十名であった。担任教師は女性で、小学校、中学校教師として十数年の経験を持ち、在職三年目であった。

一月からすでに二学期^{注②}が始まっており、子どもたちは担任やキンダーでの生活に慣れ親しんでいた。筆者がそこで強い関心を抱いたのは、『城』という主題を中心にした様々な活動であった。

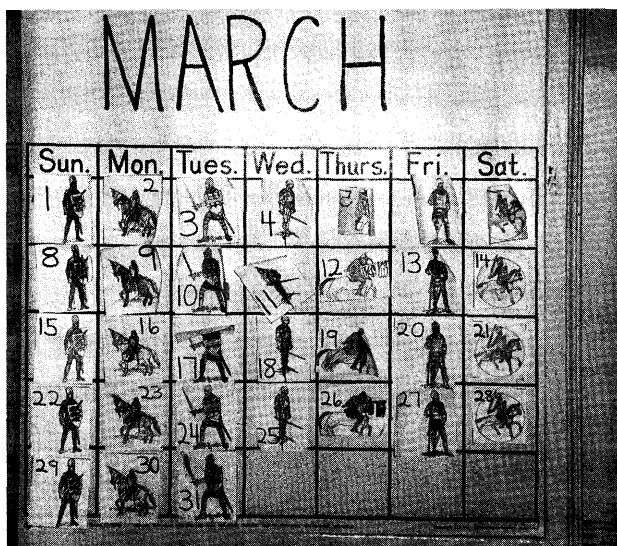
ホールランゲージ(全言語活動)

壁の装飾(写真1)やカレンダー(写真2)等の環境設定から絵本、ごっこ遊びや積み木遊び(写真3)に至るまで、『城』という主題に添って活動が展開されていた。

担任教師は学年当初、自由遊び時などを通して一人一人の子どもの様子を観察し、それぞれの興味・関心を把



▲写真1 壁も『城』の活動の場



▲写真2 子どもが参加して作成したカレンダー

握する。子どもと共に学ぶ主題となる活動の候補を考える。そして、子どもとの話し合いの時を持ち、主題を決定する。

こうした取り組みは、ホールランゲッジと呼ばれ、主題を核として子どもの全人格、すなわち情緒・身体・認知・社会性発達を助長することをねらいとする。子どもの主体性を尊重し、多角的な視点に立ち総合的な活動を繰り広げていくものである。

1 お話作り

「朝の会」や降園の前に話し合いの時が持たれていた。そこで、『城』をテーマにした「お話作り」が進行していた。英語以外のスペイン語やギリシャ語を母国語とする子どもも自分の言語で参加していた。加えて、担任が対一で「お話作り」をすすめる場面もあり（一人一人の『お話』の箱が用意されている）、一人一人の発達段階、文化背景に応じた展開が繰り広げられていた。

2 城と種まき — 認知発達論の視点から —

ある日、Rが厚紙に城の絵を描きそれを切り抜いて手に持ち室内を歩き回っていた。棚の上や本棚に城を立て

掛けて後方に下がって見ている。また城を手にとると担任(T)に近づき、見せる。

R ねえ、このしろどこにあるかしら？

T さあ、どこかしら？

R どこがいいかなあ、まわりにいけがあつてかんたんにしろにはいれないの。

T 池に何かいるの？

R ううん、いまはいないよ。

T 池の周りには？ 何かはえているかしら？

R くさとかきとか？

T 面白そう。

R それじゃあ、きとかくさとかつくろうか？

T どうやって草とか木になるのかしら？

R たねまいたり、ねっこもってくるの。

T 種まきしたことある？

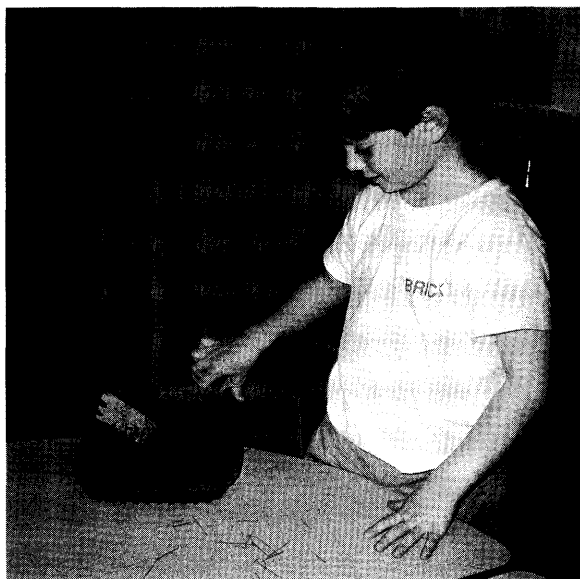
R ある、ある。カントリーハウス(田舎の別荘)でやったよ。

T ここでも出来るかしら？



▲写真3 積木の置き場所にご注目！

R できるよ。たねもってこよう。
この会話の後、担任が種を持参し一人一人が城と敷地を作り、種をまき、草が育つ様子を観察、手入れをした（写真4）。



▲写真4 城の敷地の手入れに専念

担任はRの意見を尊重しつつ言葉かけをしていた。これは、筆者にピアジェの「意味ある学びは子どもが質問するところにある」⁽¹⁾という言葉を思い起こさせてくれた。と同時に、筆者には担任がRの発達段階を前操作的思考期から具体的思考期への移行の段階であると捉えていることが手にとるようにわかった。これは、担任が認知的視点に立ち、子どもと活動を捉え子どもの発達を促している様子であると見受けられる。

3 美術館見学 ―社会、文化に適切な視点から―

月曜日の朝、Cが母親と登園。近所の美術館で開催されている『紋章、鎧かぶと』展に家族で行ったことを担任に報告した。母親は案内書を担任に手渡し、『城』の活動の一端として見学に行ったらどうかと提案する。担任は、早速『朝の会』で取り上げた。Cが話し始めると、それに対し様々な反応が起こった。

E CがみたのはAがおかあさんのくにでみたのとおんなじ？

A それって、フランスでのこと？

C フランスのもあるし、イギリスのもあったよ。

R ミス、モリ（筆者）のジャパンもあるかも？

子どもも同志が活発に意見を交換していた。そして、展覧会に行くことを決め、計画を立て、遂行した（写真5）。担任が保護者に園での活動を手紙や口頭にて報告していると共に保護者の参加、関与を歓迎していることがわかる。また、担任が一人一人の子どもの背景に配慮していることが反映され、子どもたちが筆者の背景についても興味を示したと思われる。保育の場を、担任が多様性を持つ社会・文化の一部として捉えていたからではないだろうか。

◆実践例から学んだこと

倉橋惣三は次のように語っている。

『子どもが帰った後で、朝からのいろいろのことが思いかえされる。われながら、はっと顔の赤くなることもあ



▲写真5 世界中の『紋章、鎧かぶと』が

る。しまったと急に冷汗の流れ出ることもある。ああ済まないことをしたと、その子の顔が見えてくることもある。——一体保育は……。一体私は……。とまで思い込まれることも屢々である。大切なのは此の時である。此の反省を重ねている人だけが、真の保育者になれる。翌日は、一步進んだ保育者として、再び子どもの方へ入り込んでいけるから。』⁽²⁾

これは、筆者自身過去九年間の日米双方での幼稚園教師として実践の中で思いを巡らしていたことである。筆者自身、体験を通して保育の裏付けの欠如に気付き、再び米国で幼児教育を学び始めた。

今回参加実習で出会った担任教師は、直接一つ一つ語らなくとも彼女が学んできた発達心理学や教育心理学の知識をもとに、実践を展開していた。その上、担任が特定の理論に偏ることなく広い視野を持ち、子どもの育ってきた環境や背景にも目を向けてそれらを生かしつつ保育を展開していたことに、筆者は深い感銘を受けた。

子ども——子ども、子ども——教師、教師——保護

者、子ども——教師——保護者という相互間の関わり合いを大切にし保育が展開されていた。こうした関わり合いの中で、担任は、保育者一人一人が、自分の保育実践の裏付けとなる視点を持ち、更に多角的な視野を持って保育にあたるのが大切であることを筆者に教えてくれたのである。

◆日本の保育者への課題

保育の場は、個人が生まれつきもっているもの、育てられ、育ててきたものが周りの環境との関わり合いを通して自分のことを知り、相手のことを知る所、すなわち人格形成の礎となる大切な場であると筆者は考えている。

それゆえ、子ども一人一人の成長・発達に携わる保育者の果たす役割は大きい。はっきりと目には見えなくとも保育者のものの見方・保育への姿勢・子ども観が子ども自身の身の回りのものに対する考え方に影響を与える

と言っても過言ではないと思う。これは、すなわち保育者自身、保育を裏付けるものが何であるか考えているだろうかと自己省察することではないだろうか。

今回、筆者自身が体験したこと、学んだことを少しでも実践に従事している保育者と分かち合えれば、と思う。保育者は子どもを見る目を養うために様々な理論があることを、そしてそれらはそれぞれの時代の社会の動きや子どもの文化背景によって捉え方も変わってくることに目を向けつつ、試行錯誤する研究者でありたいものである。

現在保育に従事していることは、次世代の社会を担う人間とともに学び育ちあう環境に在ることである。これを保育者一人一人が気づくことである。そして学ぶ者であることの喜びを自覚することから始めて、自己の保育の裏付けを探究していくように子どもと共に成長していきたいものである。

(コロンビア大学大学院博士課程

元東洋英和女学院大学短期大学部)

注

(1)米国のキンダーガーデンは、日本の年長児保育にあたる。多くの州が義務教育の一貫として捉えており、公立小学校に連結されている所が多い。

(2)米国の学年は、九月入学、進級で五月終了が多い。殆どの学校教育機関は一年を二期に分けている。中には、一年を四期に分けるところもある。

引用文献

(1)Forman, G. (1987). The constructivist perspective.

In Johnson. R. (Ed.). Approaches to early childhood education. Columbia: Merrill Publishing Company.

71-83.

(2)倉橋惣三(一九七六)『育ての心』フレーベル館